色彩教材研究会通信　No.341　2023.6.8

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●続・日本色彩学会に呟く

先に「日本色彩学会色彩学検定」の発足について呟いたが、この検定は日本色彩学会員とこれから入会を考えている人達の両者を対象と考えている。何事も「学び直し」が必要と考えており、平均在会年数も高くなっている今、学会員も色彩学の基礎を学び直すことも大切と思い、呟いている。

内容の詳細は、既存あるいは新設の委員会で企画する。例えば、年間に、オンラインの基礎講座を、10 回前後開催し、最後に、筆記試験でも論文試験でも構わないが、検定試験を開催して合否の判定を行うなどと。学会在籍が長く、色彩学の基礎を十分にお持ちの会員は、基礎講座を受けることなく、最後の検定試験を受けることができるようにする。

オンラインの基礎講座には一般の方々や学生が参加できるように、広報の方法を考え、多くの人を集める工夫が必要で、SNS などの活用が必要になると思われる。

一級建築士、二級建築士のような級制度は将来考えることにして保留する。

色彩学検定は毎年行い、学会内部の検定合格者と共に、学会加入者の増加が見られるようにするにはどうすればいいかに、知恵を絞って頂きたいと米寿翁は思う。　（永田泰弘）

源氏物語の色 -45「紅梅」

故柏木の弟である紅梅大納言は、匂宮を故北の方との次女、中の君の婿にと望んでいた。

その意中を伝えた歌を紅の色に染めた和紙に書き、美しく咲いた紅梅の一枝に添えて、真木柱との間に生まれた若君に託して匂宮に届けた。

一方、匂宮は乗り気ではない。琵琶が巧みで、何事にも控えめな真木柱の連れ子の宮の御方に心ひかれているからであった。

この帖の中心的な題材である梅はバラ科の落葉高木で、八世紀ごろに中国から渡来して人気を博し、「万葉集」での用例は百首を超える。古くは梅といえば白梅（はくばい）を指したが、平安時代に紅梅（こうばい）が移入されると、その色の美しさがとりわけもてはやされた。

文（ふみ）、消息などと呼ばれる手紙は、通常、その季節の草木の枝を折ったものに結んで、使者が相手に持参した。折り枝は文付け枝ともいい、文に書かれた和歌の内容と合致するように配慮され、折り枝の草木の色と紙の色を合わせて選ぶことが基本で、この場面でも留意されている。

そこに平安貴族の色彩感覚と雅な世界観を感じる。　（平山和香子）

●大辞泉ひろいよみ　20 ーい

色立体：色相・明度・彩度の三要素を座標として、さまざまな色を三次元空間の点として配列したもの。

色分け：色を塗り分けて区別をすること。人や事物をある基準によって種類分けすること。ふるいわけ。

色んな：いろいろな。さまざまな。様々の。

岩絵の具：日本画に用いる鉱物質の絵の具。藍銅鉱・孔雀石・珊瑚・瑪瑙などを粉にして精製して作る。群青・緑青・代赭など。水に溶けないので膠をまぜて用いる、岩物。

岩群青：青色の岩絵の具の一。塩基性炭酸銅が主成分。藍銅鉱から製する。

陰画：写真でネガフィルムや乾板を現像すると得られる画像。実物とは明暗・色彩が逆。ネガ。陽画の逆。

インク：筆記や印刷などに用いる有色の液体。

印刷：原稿に従って印刷版を作り、その版面にインクなどをつけて文字・図形を多数の紙や布などに刷りうつすこと。また、その技術。

インダンスレン染料：コールタールを原料とするアントラキノン系の一群の染料。スレン染料。

影青・インチン：白色の素地に青みを帯びた透明な釉を施した磁器。青白磁。　（永田泰弘）